

研究報告ノート

「信仰の対象としての富士山—富士講の月次講を中心に—」

江戸川大学 高橋 克

はじめに

わが国に存在する山岳信仰のひとつとして、富士山への信仰に基づく勧請社の浅間神社と講中の富士講がある。この、浅間神社の勧請や祭り、富士講、富士登拝、富士塚といった、富士山信仰の窺えるさまざまな事物が関東を中心に存在しているが、房総にも富士山信仰の事物が点在する。

ここでは、これまでの富士山信仰研究の先達の成果を借り、現在もおこなわれている、富士塚をあがめ、山開き、月次の講の実際を紹介し、房総の人々の富士山とのかかわりを考察してみたい。

富士講

富士山信仰は、修験の徒によって江戸時代以前から多くの信仰を集めていた。

富士講は、浅間講、仙元講などとも呼ばれている。

その始まりは、16世紀半ばに富士の人穴で修法をおこなった行者角行かくぎょうのオフセギ（厄除けや病氣治しなど）の法力。享保18年（1733）に「世のおふりかわり」を願って富士の烏帽子岩で断食入定した食行身禄じきぎょうみろくの教義などに導かれ、身禄の江戸の弟子たちによって江戸を中心に組織されたものといわれている。

江戸富士講の房総進出

江戸の富士講は、厄除けや病氣治しの御利益を願う商人層に信仰され、教義の確立と講の形式整備が進み、講自体の成熟と他者への説得力を持つようになり、講の隆盛をみるようになった。そして、この盛んになった富士講が、江戸周辺地域に伝播・発展を始めるのはほぼ寛政年間と推定されている。

千葉県（房総）では、ほとんどの地域から富士山を望むことができ、江戸との直接の交流も容易であったことが、富士講の受容と発展に大きな要素となったと考えられる。

沖本博は「江戸富士講の房総への進出」（『富士浅間信仰』雄山閣出版 s62）で、千葉県に江戸の文化が流入する時に最初に接触する地域として、

（1）江戸川流域の武蔵・下総と接する旧東葛飾郡一帯の関宿町（現野田市）、野田市、流山市、松戸市、市川市。

（2）江戸川河口の浦安市から市川市、船橋市、習志野市に至る東京湾岸北部地域。

（3）房総半島の西部海岸地域の千葉市から館山市に至る東京湾岸南部地域。

があり、富士講もそのルートにそって広がっていったとする。

一般的には、富士講も他の講と同じく「村講中」として一村をあげて参加する形が多い。そのいくつかの例を先述沖本の著書からまとめてみる。

（1）江戸川流域への進出

この地域は江戸との船運で発展した地域であるが、富士講は、北武蔵方面からの伝播のケースが見られる。

①埼玉県鳩ヶ谷市に本拠を置く丸鳩講。

沖本は、「富士宮市人穴の富士行者墓石群のなかに文化4年(1807)の没年を刻む、野田の亀屋平三郎の墓があり、側面に丸鳩の講紋が刻まれる。これから見て、寛政年間には野田地方に丸鳩講が存在していたことは確かである。」とする。

②不二道孝心講

鳩ヶ谷の小谷三志が天保9年(1838)に興した「不二道孝心講」は、東葛飾郡、印旛郡、香取郡、成田市、富里市などに広がった。従来の富士講が迷信や形式を重んじていたことから、これを改め、質素儉約・勤労奉仕・夫婦和合などの日常的道德実践を説いたのが特徴。また、天下国家などへの報恩を具体的に示すためとして、社会奉仕事業として道路・橋・堤防などの土木改修工事を行ったことも特色のひとつといえる。

③丸岩講

埼玉県岩槻を本拠とする。春日部あたりから対岸の野田市北部と中部に伝わった。他地域への拡大なし。

④山参講

野田市対岸の塚崎村(埼玉県葛飾郡庄和町)から伝わった。江戸末期から明治初年にかけて「塚越村大先達斎藤忠七(忠山斎行)」の名を刻む石碑が野田市、柏市あたりに散見される。

⑤関宿町東宝珠花を拠点とする丸宝講

丸宝講の発生は定かではない。富士宮市人穴の富士行者墓石群には丸宝の講紋を刻む墓石がある。さらに、講紋はないが、宝珠花の人と見られる墓石が2基ある。そのうちの1基に「寛政3年(1791)」の没年がある「俗称藤左衛門」と刻んだ墓がある。

関宿町(現野田市)、野田市、柏市、流山市と続く旧東葛飾郡の北部地域は、おおむね丸宝講と山参講によって二分されていた。

⑥清水講、丸弘講、丸万講

いずれも江戸市中の講。清水講は、元治元年(1864)、丸弘講は、安政3年(1856)開講。他地域への拡大なし。

(2) 東京湾岸北部地域への進出

江戸川河口の浦安市、市川市、船橋市などは、川を挟んで現在の東京都江戸川区に接する。さらに、江戸からの客船の上陸地の行徳河岸(市川市)や荷物積み下ろし地の船橋港(船橋市)があり、古くから交通の要衝であり江戸文化の房総への上陸地点であった。

①丸不二講

東京都江戸川区、葛飾区あたりから、浦安市、市川市、船橋市、習志野市、千葉市、さらに我孫子市布佐の浅間神社には、文政十二年(1829)銘の小御岳碑があり、丸不二講が印旛郡北部へと進展していたことを示す。

②山元講

江戸末ごろに存在、船橋市東中山、中山、山野などの海岸部に広がる。山野には浅間神社がある。

③山玉講

船橋市東船橋と浦安市に広がる。

④割菱講

市川市行徳に存在していたとされ、船橋市を経て内陸部の八千代市、佐倉市方面へと広がった。のちに、八千代市米本の割菱講が中心となった。八千代市米本の浅間神社の縁起を記した碑によれば「弘化年間(1844-1847年)に米本割菱講として発足、嘉永元年(1848年)にお祭りせし者」とあるので江戸末期の創建であろうと思われる。割菱講とは不二割菱講とも呼ばれ、富士山の山マークの下に武田菱の紋がある。

(3) 房総半島西部海岸地域への進出

①一山講

市原市青柳の浅間神社の後背地にある小山の頂上に浅間大神碑と石燈籠がある。その石燈籠の竿部に「三国第一山」「天明六丙午年十一月十七日」、台座に「青柳村講中」とある。この塚の近くに一山講の開祖とされる「日行八我」の墓石がある。その碑文の側面には「天明六丙午年 真乗覚峰信士靈位 七月十八日俗名三衛門」とある。

日行がこの地で講を指導したことは間違いなく、天明六丙午年の墓石台石に刻まれた「一山講中」は、県下での最も古い富士講を示し、この地が江戸富士講の房総上陸地点のひとつと考えられる。しかし、一山講は、青柳を中心に周辺五箇村に広がったのみである。

②山包元講やまつつみ(山包講の本拠のため元がつく)・山包講

市原市五井大宮神社の富士塚脇に山包元講の石碑が数基あり、その中に寛政年間江戸橋の人「禅行」が教えを伝えたとある。山包講は、千葉県全域に拡大発展した講である。

③山真講やましん

千葉市寒川町で、文化年間に活動に入った。千葉市中心部から東金街道に沿って発展した。

④山水元講やまみず・山水講

木更津市貝渕にある。千葉県内に発展してのちに江戸市中にまで進出した。

⑤山三講やましん

渋谷の山吉講から分かれた講で、講祖は山口三佐衛門(1804年没)といい、麻布に元講がある。館山市・富浦町・千倉町・三芳村などに見られるが、千葉県内で山三講の存在が確認されているのは、安房だけ。どのような経路で安房に伝わったのかは不明だが、那古(館山市)の潮音台にある山三講中奉納の石宮は文化14年(1817年)と比較的早い時期のもので、台座には70名以上もの講中が名前を連ねている。

以上の分布地域は、東京湾臨海部であり、江戸との交流拠点であった。明治初年には、ほぼ千葉県全域に富士講が浸透したとみられるが、その普及は山水、山包の両講の発展が大きく寄与した。

江戸の富士講は、食行身禄の弟子たちによって興された「身禄派」であり、身禄の正直と慈悲をもって勤労に励むこと、男女は同格であることといった教義・経典を持ち、講名と笠印を有する。商人や職人の気質を反映して派手で威勢が良いのが特色で、まず東京湾岸の漁民たちに受容された。

とくに、東京湾岸の漁民にとって富士山そのものが天候を予測するための日和見のポイントであり、漁区や漁場を特定し、現在位置を知るための目当て(ヤマアテ)ともなっている。また、集落の浅間神社は帰港の目当てでもあった。このような富士山との生活や浅間信仰があったから、教義・経典・講の形式が整った江戸富士講がすんなりと受容されたのではないだろうか。

富士塚

富士塚の始まりは、安永8年(1779)江戸高田の造園師藤四郎が、師の食行身禄を追悼するために、形として残るものを残そうと考えて富士塚を築造した。

この時、頂上に富士山の神「仙元大菩薩」を祀る石祠を置き、塚の下には里宮を建て、中腹に小嶽石尊大権現を祀る祠を建てて、中腹の身禄入定の霊地烏帽子岩にあたる場所には立石を置く。そして山裾の右手に胎内を象った洞穴を作っている。さらに、富士山頂からいただいていた土を塚の頂上

に埋め、富士山の分身として神格化を図った。また、溶岩を山に張り付けて実物感を演出した。ここに、頂上に石祠、中腹に向かって右手に小御嶽を、左手に烏帽子岩、山裾に胎内という身祿富士塚の基本が形作られた。

藤四郎が富士塚を築造したもう一つの理由に、交通機関の乏しい時代に経済的に恵まれない人や婦女子、体の弱い人、足の丈夫でない人は、どんなに富士山を信仰する気持ちがあっても実際に富士山に登ることはできないため、少しでも富士山を感じてほしいという気持ちがあったからである。

明治2年(1869)に築造された品川富士に建てられている石碑には、「富士山遥拝所」の文字がある。そのほかの塚にもこの文字が散見される。このように富士塚には、実物の富士の遥拝所の役割がある。塚の上に登れば富士山が望見できるので、講員が富士山を参拝する場としての機能も持っていた。富士塚は、実際に富士山の見える場所に築かれている。

富士塚の石造物

富士塚の築造は江戸を中心として、その近郊の各地に広がり、同時に身祿の教えに従う有力先達たちが、埼玉、千葉、神奈川の各地に講を成立させ、富士塚の築造がおこなわれた。

富士塚山頂の石祠を、江戸期の塚の場合は、「仙元大菩薩」あるいは「さんめいとうかいざん参明藤開山」。明治以降の場合は、「浅間大神」または「浅間神社」などと刻んだ碑の場合が多い。小御嶽の石祠は、「小御嶽石尊大権現・大天狗・子天狗」あるいは「小御嶽神社」などと刻んだ碑の場合もある。また、日蓮が百日の行をしたとされる経ヶ嶽の位置には「南無妙法蓮華経」の髭題目を彫った碑を、雲切不動の位置には不動明王の石像か「大聖不動明王」の文字を刻んだ碑を建てているのが一般的である。そのほか、合目を刻んだ石標、富士山の名所「宝永山」「亀岩」「天地境」などの名所石を建てている場合もある。さらに、江戸末期から講碑が塚の各所に建てられるようになる。先達の登山三十三度あるいは五十度を記念する満願日や講そのものの記念碑などである。材料は、板状の根府川石が多く明治以降に急増する。塚築造の記念として、或いは飯香岡八幡宮に隣接する大正時代に建立された富士塚に見られるような、他の講からの富士塚建立のお祝いに贈られた碑もある。

富士塚を中心とした習俗

江戸末期、身祿を祖とする富士講が爆発的に広がる。しかし、その身祿が否定したはずの呪術を基本とし、梵天を持って荒々しく練り歩いたり、焚き上げをする修験の行体を成していた。当時は一揆や打ち壊しが頻発していた社会状況にあり、ごく普通の町人がそのような山伏まがいの行動をすることは、一種の反幕府運動とも捉えられて、安永4年(1774)には町奉行の御触書で富士講が禁じられている。それでも下火になることはなく、関東一円に広がり、房総にも富士講が伝わるのである。

富士講は明治大正昭和と時代とともに衰退し、地域によっては富士講にかかわる習俗も消滅してしまっているところが多く、現在では塚だけが残っている。

しかし、品川神社の品川富士では7月1日に品川丸嘉講の人々が、塚の脇にある浅間神社で拝み、はだして品川富士に登り、頂上と中腹の小御嶽の石祠の前で拝み下山する。この行事に品川神社の神官は関与しない。また、品川富士は富士山を望見して遥拝する場としての機能も顕著である。富士塚に登り、富士を拝すことで富士山そのものの山頂にいる自分を実感することは難しくなく、そこには江戸趣味の一つである、見立てが底流に流れているのではないだろうか。

房総に伝わった富士講は、富士参拝、富士塚構築と、既存の信仰と共存しながら富士講を定着させていく。地域に根ざした神社は多くの神をまつる聖地の性格を有す。様々な神社の境内に富士塚が存在することは、日本人の現世利益を求めることに敏感な一面もうかがえる。

市原市八幡の浅間講

千葉県市原市にある浅間講の講社は、山包講である。山包講は、江戸の富士講の一派で、江戸橋の修山禅行(包市郎兵衛)が寛政年間(1789~1801)に、市原市五井の養老川沿岸の地、吹上に来て広めたとされている。五井の大宮神社境内には富士塚があり、浅間神社として祀られている。

その山包講の広まっている市原市八幡の地には、濱本町・観音町・南町(新田)・本町のそれぞれの町に浅間講があったが、現在では濱本町と観音町以外はやめてしまっている。そして、残った二町会がまとまって八幡富士講(丸八講)として組織されている。

また、観音町は、お焚きあげで使用する線香立てに「山水」の講印があり、弘化2年(1845)に山水講として創始されたと伝えられている。山水講の御師宿だった富士吉田市の「浅間坊」の廃業に伴って、同じ飯香岡八幡宮の氏子であることもあり、隣町の濱本町と一緒に八幡宿という地域の講として「丸八講」を形成し、富士吉田市の「外川家」に泊まるようになったと考えられている。

八幡のセンゲンサマ(富士塚)

八幡には、飯香岡八幡宮に隣接してセンゲンサマと呼ばれる富士塚がある。

この富士塚は、大正2年(1913)にこの場所に移転したもので、先達や植木職人たちが仕事の合間を縫って築いたもの。塚の石は、貨車で富士山の溶岩を運んだものと言われる。

センゲンサマの祭りは毎年旧暦の6月1日。午前中は八幡宮の宮司による開山祭がおこなわれる。その後、浅間講の行者らによってふたたびオガミ(神事)がおこなわれる。

オガミは、濱本町・観音町が毎年交互に取り仕切り、両町の講員が参列する。さらに、神楽殿では担当する町の囃子連により「八幡囃」が奉納される。その後、午後からは、婦人会による日舞の奉納舞踊がおこなわれる。講員には浅間神社(写-1)の神札が配られる。



写-1

平成26年(2014)は、6月27日(金)に開山祭がおこなわれた。次第は以下の通りである。

- 9:59 神事開始宣言
- 10:00 修祓・献饌
- 10:03 祝詞奏上
- 10:08 玉串奉奠
- 10:13 撤饌・閉式宣言
- 10:14 乾杯
- 宮司退席
- 10:18 講員のみによるオガミ開始。
先達による祝詞奏上など。(写-2)
- 10:25 2礼2拍手1礼で終了
- 10:30 神楽殿で「八幡囃」が奉納される。
- 12:55 日舞などの奉納舞踊が開始される。2~3時間行われる。



写-2



写-3

月次講

「丸八講」にはツキナミ（月次）という毎月の講行事「オガミ」がある。

濱本町のツキナミについて試みる。

講員は20名ほど（平成26年調査時）。

毎月20日にツキナミをおこなう。

しかし、6月は浅間様の祭り、7月はサンヤマコウ（三山講）の祭り、8月は富士登山と吉田の火祭りがあるのでおこなわない。

3月と9月は彼岸の入りの日におこなう。

内容は、町の公民館で、午後1時に集合して、2時からオガミを始める。平成2年（1990）までは、当番の講員の家をヤドにして、オガミダンスなどの道具一式を順送りしてやっていた。

組織は、ダイセンダチ（大先達）、センダチ（先達）、フクセンダチ（副先達）の三役があり、ほかに会計2名がいる。

富士吉田市文化財調査報告書第6集「富士山吉田口御師の住まいと暮らし—外川家住宅学術調査報告書—」に収録された月次祭の概要と、平成26年11月20日（木）の調査をもとに月次の様子を記す。

場所は、濱本町町民館（市原市八幡 1179-2）。

13:00頃を目安に講員が集まり、町民館の外には富士講の幟旗である「マネキ」（写—3）を軒に吊し、幟を立てる。

内部は、東北側の壁に庚申の舂形午玉ますがたごろうを中心に参明藤開山・小御嶽の3幅の掛軸を掛け、その前にオガミダンス（写—4）と呼ばれるオガミの用具を収納しておくダンスを祭壇にして祭具を飾り、葉蘭を活け、塩、米、酒を供える。祭壇の下段には、先達に代々伝わる巻物と折本、火打石が供えられ、祭壇手前にはお焚き上げ用の線香立てを置く。（写—5）

13:35頃会長が火打ち石で火を切り、参加した講員にお祓いをする。（写—6）その後、全員で2礼2拍手1礼をおこなって、会長が「富士の御傳」のはじめの祝詞部分を奏上し、以後を全員で唱和する「オガミ」が始まる。次に「神徳経」を唱和する。ここで、お焚き上げをし灯明をとると八幡講の祭文を全員で唱和する。オガミでは、このように全員で読み上げ、区切りには鈴を鳴らす。（写—7）最後に鈴をならし拍手を2回打って、神降ろしが終了する。

13:55頃、参加講員全員で乾杯をして直会となる。祭壇にともしたお灯明が消えるまでが直会の時間。（写—8）その途中で会長が祭壇に向かい神送りをする。

観音町かんのんちょうのオガミの内容のほぼ同じである。

終わりに

以上、これまでの研究の成果と実際の富士塚の姿の確認、現行の富士講の様子をまとめてみた。房総の人々の富士山と



写—4



写—7



写—8

のかかわりは、富士山がそこにあることが当たり前の存在から信仰の対象へと変わっていく過程が理解できる。

また、富士講の信仰の現状としては、かつて、厄除け、病気治し、社会奉仕、救世、家業を大切にしなければならない、正直と慈悲をもって勤労に励むこと、信仰の下での男女の同格などを教義とした信仰の姿は高齢者のみの寄り合い講になってしまい、後継者が育っていない状態である。

民間信仰は時代の影響を受けやすく、変化していくものであるから、それがいかなる変化を示そうとも必然であると考えれば、これもまた手を出すことなく見守るしかないのだろうかと思ひたる思いである。

今私たちの出来ることは、見守ることと、少しでも多くの聞き取りを残し、途絶えてしまっても道具類の残る場合があるので、諸道具類の収集と保存も心がけていくことを着実に実行していくことであらう。

<参考文献>

- ・沖本博「江戸富士講の房総への進出」(『富士浅間信仰』雄山閣出版 s62)
- ・千葉県市原市飯香岡八幡宮 神官平沢牧人からの聞き取り
- ・富士吉田市文化財調査報告書第6集「富士山吉田口御師の住まいと暮らし—外川家住宅学術調査報告書一」

<参考>

江戸時代年号

慶長	1596-1615	元和	1615-1624	寛永	1624-1644	正保	1644-1648
慶安	1648-1652	承応	1652-1655	明暦	1655-1658	万治	1658-1661
寛文	1661-1673	延宝	1673-1681	天和	1681-1684	貞享	1684-1688
元禄	1688-1704	宝永	1704-1711	正徳	1711-1716	享保	1716-1736
元文	1736-1741	寛保	1741-1744	延享	1744-1748	寛延	1748-1751
宝暦	1751-1764	明和	1764-1772	安永	1772-1781	天明	1781-1789
寛政	1789-1801	享和	1801-1804	文化	1804-1818	文政	1818-1830
天保	1830-1844	弘化	1844-1848	嘉永	1848-1854	安政	1854-1860
万延	1860-1861	文久	1861-1864	元治	1864-1865	慶応	1865-1868

・現在も活動している富士講 千葉県

(北口本宮富士浅間神社 HP <http://sengenjinja.jp/fujikou/>による)

- ・千葉市 山真 十三夜神明講
- ・千葉市 登渡富士講
- ・千葉市 摩利山神明講
- ・松戸市 富士嶽教会松戸清水講
- ・市川市 丸藤 高瀬教会
- ・船橋市 山玉丸下講社
- ・船橋市 富士山野講
- ・習志野市 藤崎富士講
- ・八千代市 下総割菱講
- ・鎌ヶ谷市 天明道心教会
- ・市原市 富士浅間講中
- ・市原市 富士講
- ・市原市 山丸八講
- ・市原市 濱本富士講
- ・市原市 八幡講社
観音町富士講
- ・安房郡 山参講 安房富士教会
神道扶桑教